2018
5
Bulletin

# 東京山手

CHARTERED SEPT.11.1953

Y'S MEN'S CLUB OF TOKYO YAMATE

YAMATE YMCA, 2-18-12, NISHIWASEDA, SHINJUKU-KU, TOKYO TEL. 03-3202-0321 FAX.03-3202-0329
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-18-12 山手YMCA内

2017 - 18　会長主題

## 共に行動　共に喜びを

| | | |
|---|---|---|
| あずさ部長 | 大野貞次（東京西） | 「継続は力なり・一歩でも前に・そしてあがこう 」 |
| 東日本区理事 | 栗本治郎（熱海） | 「広げよう　ワイズの仲間」 |
| アジア地域会長 | Tung Ming Hsiao （台湾） | “ Respect Y's Movement” 「ワイズ運動を尊重しよう」 |
| 国 際 会 長 | Henry Grindheim （ノルウエー） | “ Let Us Walk in the Light－Together” 「ともに、光の中を歩もう」 |

会長　上妻英夫／　副会長　尾内昌吉　／　書記　浅羽俊一郎　／　会計　中村孝誠
直前会長　金本伸二郎　／　ブリテン　功能文夫　／　担当主事　星住秀一

**2018 年　5 月例会**
＜ＥＦ／ＪＥＦの月＞

と　き　5 月 15 日（火）18：30－20：30
ところ　山手センター　101 号室

| | |
|---|---|
| 受付 | 尾内さん、尾内規子さん |
| 司会 | 尾内さん |
| 開会点鐘・挨拶 | 上妻会長 |
| ワイズソング・モットー | 一　同 |
| 聖句朗読・祈祷 | 司会者 |
| ゲスト・ビジター紹介 | 会　長 |
| **＜会　食＞** | 一　同 |
| ハッピーバースデー | |
| **＜卓話＞** | |
| 「 人道支援等について 」 | 浅羽俊一郎さん |
| ニコニコ | 一　同 |
| 報告・連絡事項 | 各担当 |
| 閉会点鐘 | 会　長 |

当番（第３班）浅羽、金本、増野

**ワイズメンズクラブ　モットー**

『 強い義務感をもとう
義務はすべての権利に伴う 』

“ To acknowledge the duty
that accompanies every right ”

**今月の聖句**

わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。
「神を愛している」と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。
目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。
神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです。
これが、神から受けた掟です。
ヨハネの手紙１　４章 19～21 節

**5 月　HAPPY　BIRTHDAY**

――――――

**会費の納入**は、会計（中村君）への納入または下記銀行口座への振込みをお願いします。
**三菱 UFJ 銀行　高田馬場駅前支店**
**普通 3548431「東京山手ワイズメンズクラブ」**

**４月報告**

| | | |
|---|---|---|
| 会員在籍数 | | 14 名 |
| 例会出席者 | メ　ン | 9 名 |
| | メネット | 1 名 |
| 会員出席率 | | 64 % |
| ゲスト・ビジター | | 9 名 |
| | | 合計 19 名 |
| ニコニコ | 6,113 円（累計 57,233 円） | |
| ＢＦ　国内切手　－g | 外国切手－ｇ | |

## ４月例会　報告

17日（火）１８：３０～２０：３０
山手センター　１０１号室
出席者：上妻、浅羽、飯島、飯島（愛）、飯野、尾内、尾内（規）、功能、星住　9名
メネット：上妻清子さん　1名
ゲスト・ビジター
**西浦昭英先生（卓話者・聖学院高校教師）**
新井克巳さん（東京YMCA会員）
駒野湧紀さん（立教大学YMCA）
鈴木伶美さん（　〃　）
山根一毅さん（日本YMCA同盟スタッフ）
市来小百合さん（　〃　）
有川友莉さん（城西幼稚園先生）
福島多恵子さん（元東京目黒・メネット）
山添　慈さん（山手センター新職員）
ゲスト・ビジター計　9名
合計19 名

西浦先生は聖学院高校の修学旅行の引率がきっかけで沖縄に通うようになり、毎年「沖縄平和の旅」を主宰しておられる方です。昨年12月、その沖縄の旅に参加して、辺野古や普天間基地、ひめゆりの塔、平和の礎などを見学した飯島さんが司会を務めました。

4月のハッピーバースデーは尾内規子さん、飯島さん、福島多恵子さん、功能の4人を祝いました。

そして、卓話の時間になりました。

西浦先生は「**沖縄・・・本土の人に知られていない基地のはなし　聖書の立場から考える**」と題して、スライドを映しながら、沖縄の米軍基地につて何が問題かをお話されました。資料も読みごたえのあるものをたくさん配布されました。

**＜卓話要旨＞**

沖縄はかつては独立国「琉球王国」であったが、1879年（明治12年）の「琉球処分」で日本領土となり沖縄県が設置された。

1945 年の沖縄戦では住民を巻き込んだ捨て石作戦で約20万の死者の過半数は住民であった。そして、1952年に講和条約・日米安全保障条約が発効し日本は独立を回復したが、沖縄は1972年に

施政権が日本に返還されるまでの 20 年間米軍の支配下におかれた。

沖縄の面積は日本全土の中の 0.6%でしかないが、沖縄の米軍基地の広さは 2006 年現在で 233 平方キロ、日本全土の米軍基地 312.2 平方キロの 74%を占めている。沖縄県全体の 10.2%が米軍基地で、沖縄本島はその約 20%が基地、嘉手納町ではその 83%が基地である。

沖縄の米軍は陸軍、海軍、空軍、海兵隊の 4 軍のうち、海兵隊の割合が多い。海兵隊というのは他国を攻撃する殴り込み部隊で日本防衛には役立っていない。米軍のグローバルな戦略の中核基地である。基地の土地は国有地が 3 分の 1、公有地が 3 分の 1、残り 3 分の 1 が私有地で約 3 万人の土地所有者がいる。

基地反対運動は徹底した非暴力主義で続けられてきている。伊江島の阿波根昌鴻（あはごんしょうこう）さん（故人）の土地闘争資料館の壁には「すべて剣をとる者は剣で滅ぶ」という聖書の言葉に続いて「基地を持つ国は基地で滅ぶ　核を持つ国は核で滅ぶ」と書かれている。

100 匹の羊の中の 1 匹を神は心に止めてくださるとキリストが語られたたとえ話を読むたびに、人口で日本全体の 1％、面積で 0.6%の沖縄のことを思う。少数者を心に止めてくださる聖書の真理を大切にしていきたい。

沖縄の基地問題について基本的な勉強をさせていただいた貴重な時間でした。

（まとめ：功能）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

**＜4月例会　ニコニコ元気カードから＞**

**私は今日このことで元気です。**

**有川友莉さん**　貴重なおはなしをうかがえました。ありがとうございました。

**新井克巳さん**　35 年前、沖縄愛楽園で学んだことを思い起こしました。

**上妻英夫さん**　西浦先生から未だ訪ねたことのない沖縄のお話を聞けるので思いも変えなければと意気込んでいます。

**上妻清子さん**　久しぶりのワイズ例会に参加、ありがとうございました。感謝。

**浅羽俊一郎さん**　沖縄の問題が私たちの問題だということを学ばせてもらいました。

**尾内昌吉さん**　YMCAチャリティー・ゴルフで「最高齢者賞」を頂戴しました。感謝。

## お　た　よ　り（4月）

**＜上妻英夫さん＞**「卯月入り差し込む朝日のあたたかさ」　4 月に入ったらカーテンから差し込む朝日が急に暖かく感じる様になりました。

**＜金本伸二郎さん＞**　残念ですが欠席します。

**＜青鹿博明さん＞**　（退会）ご承認ありがとうございました。肩の荷がおりました。

**＜増野　肇さん＞**　退会をもう 1 年延ばしました。出られるときには参ります。いま調布ではがんばっています。

## ヨルダン会　報告（4月）

**日時：　4月27日　　14：30～16；00**

**場所：　華屋与兵衛**

**出席：　浅羽、上妻、中村、尾内**

**議事**

1　5月例会
　卓話者　浅羽俊一郎さん
　題目「人道支援等について」

2　6月例会
　会長引継ぎ、今期の反省、来季の方針の提示

3　山手学舎対応につき審議したが前回例会で話のあった食料提供、食費代援助等が考えられるが保留となった。
　別の支援先としてミャンマーの子供達の学習指導をする学生の支援も検討してはどうかとの意見が出された。

4　例会会場の変更
　7月 17 日（火）18：00～20：30
　早稲田奉仕園会議室の予約をとった。
　9月以降も使用することとした。

5　インビテーションキャンペーン申告書並びに例会出席率報告書
　作成し菰渕事業主査あて回答した。(担当尾内)
　例会出席率は下記のとおり。
　17/5 月　75%　6 月　75%　7 月　71%
　8 月　50%　9 月　71%　10 月　86%
　11 月　79%　12 月　64%　18/1 月　64%
　2 月　64%　3 月　64％　4 月　64%
　年平均　69%

6　階下ロッカールームの整理
　7月25日以降耐震工事により使用不可のため、5月中にロッカーの整理を行なうこととした。　（以上）

## 4 月 25 日は

## 世界マラリア・デー！

浅羽俊一郎

UNHCR 時代の知り合いがマラリア・ノーモア・ジャパン（MNMJ）の理事になられていてその方からロールバックマラリア（RBM）を推進しているワイズメンと一緒に世界マラリアデーのイベントをしましょう、と声をかけられたのが一昨年でした。（数年前から区・部レベルで RBM に力を入れてきましたが、世界マラリアデーは時折メールで知らせる程度でした。）

そして昨年の 4 月 25 日の世界マラリアデーに MNMJ 主催のイベントに国際・交流事業の太田メン（世田谷 C）や進藤メン（東京 C）と一緒に参加しました。銀座の小ホールでマラリアの講義とレセプションはこじんまりとしたものでしたが、これを皮切りに MNMJ は SDGs（持続可能な開発目標）の関連団体とのネットワーク作りを進めることになります。その後私たちは MNMJ と数回協議しましたが Y's の組織や特質を分かってもらい、当役員会に MNMJ の意向を理解してもらうのに進藤メンがかなり貢献されました。

そして今年の世界マラリアデーには学生たちを大勢巻き込むイベントにワイズメンは**東西日本区の後援名義とボランティアという形で参加し**、来年のイベントでの協力如何を検討することになった次第です。

当日上智大学の大会議室に早めに到着したメンは MNMJ の資料のセット作りと配布、受付、誘導案内など皆さん手際よく動きました。西日本区からは大野理事と吉田由美（西日本区事業主任）、また甲府 21 クラブから薬袋メンが出席されました。プログラムはマラリア対策についてわかりやすい講義、目玉の狂言「蚊相撲」とパネルトークでした。当初の予定を大きく上回って 230 人余りが参加しました。翌日の朝日新聞に記事が掲載されました。（ワイズは 26 名・山手クラブは上妻、中村、浅羽）

今回のイベントを参考に、新しいサービスのやり方が生まれるかもしれません。ただ、胸バッジより派手にワイズを知らしめたいものです。「あのおっさん達は何者？」と思った学生たちもいたようです。

今のところ MNMJ との協議には国際・交流事業の進藤、太田と比奈地（東京）、小原（たんぽぽ）と浅羽が参加しています。

（写真は狂言「蚊相撲」の舞台です。）

## YMCAニュース

**1．** 4 月 12 日、「**第 28 回東京YMCAチャリティーゴルフ大会**」を千葉県成田市の「レイクウッド総成カントリークラブ」で開催し、31 グループ 121 名が参加しました。支援金約 50 万円はフレンドシップファンド（経済的困難を抱える家庭の子どもたち支援）や、障がい児及び不登校児支援活動のために用いられます。

**2．** 4 月 15 日、「**第 22 回高石ともやバングラデシュ奨学基金チャリティーコンサート**」が日本基督教団浅草教会で開催され、約 100 人が来場しました。またパネル展示を通してYMCAのバングラデシュ子ども教育支援活動について報告をし、コンサート益金から、東京YMCAが支援をしている働く子ども達の学校（バングラデシュYMCAが運営）で学ぶ子どもたちの奨学金として、15 万円をご寄付いただきました。

**3．第 21 回会員芸術祭**が 5 月 21 日（月）～26 日（土）東陽町センターで行われます。

**4．第 16 回会員大会**が 5 月 26 日（土）13 時 30 分～東陽町センターで行われます。（星住秀一）

# 「回天」生還学徒の言葉

浅羽俊一郎

ここ数日亡父の書簡類の整理処分に着手したところ、退職後それも 80 歳過ぎてからのものが意外と多いのに驚きました。ほとんどが旧制高校の学友や戦友からの便りと懇親会の写真。自由時間が増えた反面、体力は劣ろえ、仲間と気楽に会えない、訃報は増える。文章の端々から労いが伝わります。直筆の手紙は達筆もあれば癖字もあるが下手字はない。数枚に渡って墨で綴られたものもある。書き慣れた世代です。その表現も筆跡も勉強になります。

中でも目を引いたのが父と同じ出陣学徒で特攻魚雷「回天」を生き残った神津直次氏からの書簡でした。試みに検索すると以下の一文が出てきました。それは氏の上梓された「人間魚雷回天」の後書きでした。あの戦争を青年として経験した世代がいなくなりつつある今日、ワイズ仲間に紹介しようと思う次第です。以下は抜粋です。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

神津直次著「人間魚雷回天」後書きより

自分が実際に見て、聞いて、触れて、感じたことを、そのままに書きとめたいと思って書きはじめた記録だが、いざ書いてみると、事実は筆のあいだからこぼれ落ちてしまう。 たとえば、あのとき「死にたくない」と思ったと書いても、それだけでは正確に事実を伝えていない。「死ぬのはいやだ」という気持ちが、心の中の相当部分を占めていたことは事実であっても、同時に「自分の命と引き換えに国民を護ろう」という犠牲的精神も、「必死に戦って、戦死するのもやむをえない」という諦観も、「国の命令に忠実にしたがうまでだ」という義務完遂の充実感も、さらには「永久にその功をたたえられる」という名誉欲すら心のどこかにひそんでいたのだった。・・・心の中のことは正確に表現できなくても、起こった現象は正確に書けるものと思った。しかし、これもむずかしいことだった。・・・書かれるものは「事実そのもの」ではなく、「私が事実だと思ったもの」にすぎない。第一稿ができたとき、同期の仲間を中心に 20 数名にコピーを送り意見を聞いた。まちがったところの指摘もあり、知らなかったことも教えてもらった。いろいろの意見も送ってもらった。できる限り文中にとりいれた。・・・この文を世にだすことに反対の仲間もいる。回天隊が志を同じくする者の集団ではなかったのだから当然である。

私の心の動きは 40 数年前の、そのときの動きである。さいわい戦争中のメモ数片と戦後一年半のあいだに書いた記録 80 枚があるので、それにもとづいた。・・・ 当時の政府は日本の支配を拒否する東亜（東アジア）の諸民族に、残虐な戦いをしかけ、支配に服した諸民族を奴隷のごとく扱っていた。その事実は伏せられており、「東亜の解放」という旗印だけをうたいあげていた。その欺瞞を見抜けなかったわれわれはなんとおろかであったことか。　われわれは国の命令だから軍隊にはいり、国の命令だから敵と戦うのを国民である限り当然のことと思っていた。これはなまじソクラテスなどを読み、「悪法といえども法は法なり」という意味を曲解していたからである。・・・当時の日本はまさに一握りの専制君主の圧制のもとにあったのだから、ソクラテスの言葉の通用する状態ではなかった。もちろん、当時、政府の命令にしたがわないことは、虐殺されることだとわれわれは考えていた。確実な虐殺よりは、戦死するかも知れないが、戦死しない可能性もある「兵役」を選ぶほうが得だと考えた者もいただろう。しかしわれわれはそれ以上に積極的だった。ことの本質を見抜けなかったとも言えよう。私たちはあの戦争について「降りかかった火の粉は消さねばならない」と考えていた。多くの仲間もそう考えていたと思う。

この本は誠忠、悲壮このうえない回天隊員の中にあって、心の中ではふるえていた弱虫隊員の手記である。これは特異な例であって、戦死、殉職した多くの隊員の中には、私のように弱い者は一人もいなかったと信じたい。しかし私自身、搭乗十五回、同乗三回を経験し、殉職する危険を常に抱えていた。もしも殉職していたら、私もまた「回天烈士」の一人として、神様あつかいをされていたと思うと慄然たるものがある。・・・生き残った者として、その心の中を公表する義務があると信ずる。　（以上）